

彩のきずな 栽培暦

品種の特性 (対比に比べて)

- 出穂期は2~3日早く、成熟期は同等。
- 稈長は10cm程度短く、穂数は1割程度多い。
- 耐倒伏性は「やや強」。
- 収量性は高く、1割程度多収。
- 食味は粘りがあり、同等以上。
- 高温に強く、白未熟粒の発生が少ない。
- 「彩のかがやき」と同等の病害虫抵抗性を持つため、減農薬栽培に適する。

適応地域及び作型

- 県下全域の早植栽培地帯、または6月末までに移植可能な普通期栽培地帯。
- 障害型冷害に弱いことから早期栽培は避ける。

病害虫防除

- 減農薬栽培を基本とする。
- 耕種的防除(置き苗の撤去、畦畔管理、ケイ酸資材の投入等)を励行する。
- 紋枯病の発生に注意する。
- 穂もちには強いが、まったく罹病しないわけではないので、葉もちが発生したら、必ず防除する。

中干し

- 有効茎が確保(20~25本/株)できたら、中干しを確実に実施する

施肥

- 基肥の過剰施用は、籾数が過剰となり、登熟期間が不良気象の場合、くず米が増加しやすいので避ける。
- 穂肥施用時の葉色が目安より濃い場合は施用時期を5日程度遅らし、施用量も3割程度減らす。

高温障害軽減のための追肥

- 登熟期に著しい高温に遭遇すると、「彩のきずな」でも白未熟粒発生による品質低下が心配される。早植栽培では移植後30~35日頃の葉色が4~3.5以下に低下した場合は窒素成分で1~2kg/10a程度、普通期栽培では移植後20~25日頃に1kg/10a程度追肥する。

収穫

- 刈り遅れないよう早めの収穫を心がける。特に高温時には、登熟期間が極端に短縮することがあるため、収穫の目安の早いうちに収穫を行う。
- 登熟期間が不良気象の場合、帯緑籾が残りやすいので、出穂後日数、積算気温を目安に収穫を行う。

乾燥・調製

- 高水分籾の高温急激乾燥は絶対に行わない。
- 食味の確保、維持のため、過乾燥とならないよう注意する。(玄米水分15%を確保)
- 調製は必ずライスグレーダ(1.8mm目以上)で行う。

生育ステージと主な作業の目安

早植栽培		4月		5月		6月		7月			8月			9月			
月	旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
生育ステージ		移植		移植期			有効分げつ 決定期		最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期			収穫の目安		
		50~60株/坪 2~4本/株													出穂後日数	35~48日	
															帯緑籾割合	50~10%	
															積算気温	900~1200℃	
水管理				浅水管理				中干し 間断かん水			深水	間断かん水 落水					
主な作業		播種 施肥 5~7 Kg/10a		土改剤散布 基肥散布・代かき 箱剤散布・移植 除草剤散布			中干し 6月下旬~ 7月上旬頃		紋枯病防除 穂肥施用 ※	穂肥 2~3kg/10a (出穂前25~23日) 幼穂長1~2mm 葉色4~4.5を目安					収穫作業		
															※前年に稲こうじ病が多発したほ場では、有効な薬剤を散布。		

普通期栽培		5月		6月		7月		8月			9月			10月			
月	旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
生育ステージ		移植		移植期			有効分げつ 決定期	最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期			収穫の目安			
		60株/坪 2~4本/株 疎植は避ける												出穂後日数	38~48日		
														帯緑籾割合	30~10%		
														積算気温	900~1100℃		
水管理				浅水管理			中干し		深水			間断かん水 落水					
主な作業		播種 施肥 5kg/10a		土改剤散布 基肥散布・代かき 箱剤散布・移植 除草剤散布			中干し 7月中旬~ 7月下旬頃		紋枯病防除 穂肥施用 ※	穂肥 2kg/10a (出穂前25日) 幼穂長0.5~1mm 葉色4を目安				収穫作業			
														※前年に稲こうじ病が多発したほ場では、有効な薬剤を散布。			